



Title	私たちのいのち
Author(s)	成戸, 美恵子
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2021, 3, p. 21-27
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79243
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集 1 臨床哲学の今——在学院生・修了生によるエッセイ

私たちのいのち

成戸美恵子

私たちは、自然災害やさらに昨年から、新型コロナウイルス流行の脅威にさらされる日々を過ごしています。そのような日々を送ると、「いのち」について考えさせられる機会も多くなっているように思います。「いのち」とひらがなで書くと、広く大きく深く永遠性を、私は連想します。「命」と漢字で書くと、身体、限りあるものという連想が浮かびます。後ほど、「いのち」と「命」について橋本洋子さんが言われていることを紹介しますが、多くを含み込む「いのち」について、書籍や歌を通して人生の先輩方々から学ばせて頂いたことを書いて行きたいと思います。

1. 私たちのいのちと地球

三木成夫さんによると、私たちのからだを造る細胞を分析すると、地球を組織する元素はすべて私たちの細胞のなかにあり、私たちの細胞の一つ一つは、もちを小さくちぎったように小さくちぎられた地球と言われます。その地球において、私たちの始まりである生命物質は、その物質の蛋白質を造るアミノ酸が宇宙空間の彼方から地球の表面の粘土層、“泥の海”に落下し、そこから生命物質が発生するための条件がわずかな期間準備されたのは、約四十億年前であり、その後、最初の生命が現れたと言います（三木 2013, pp.44-45）。生命の進化と滅亡の過程を幾度となく繰り返し、気の遠くなるほどの期間を経て、私たちが今ここにいます。

また、三木さんは、一個の受精卵という細胞から何度も分裂を繰り返しながら私たちの体になっていくその過程を「胎児の世界」として教えてくれています（同掲書 pp.45-63）。「最初の細胞ができてからの後の、今日までの三十数億年の長い進化の過程を、何か幻想のごとく再現する、まことに不思議な世界」（同掲書 p.46）と表現しています。それは、カマキリもサケもヘビもドジョウも人間もそうなのだと言います。「赤ん坊が生まれるまでの十月十日、母親の胎内ではこの生命進化の大河ドラマが走馬灯のように繰り返し展げられる。それは舞台も、衣装も夢のように早変わりする無言劇をみているようなもの」（同掲書 pp.46）とも表現しています。それは、「魚時代の卵生の名残」（同掲書 p.46）をのこし、「魚類から両生類の面影」（同掲書 p.48）へと変化し、胎児は上陸し「爬虫類の面影」（同掲書 p.51）を示していきます。受胎から三十二から三十八日は、「古生代デボン紀の魚時代から、中生代初頭の獣形爬虫類の時代にいたる一億年を超す“幻の上陸劇”の再現」（同掲書 p.53）がわず

が一週間で経過していると言います。上陸を終え、「エラの血管が肺の血管に変わり、心臓も二つに分かれて」（同掲書 p.60）原始哺乳類の出発となるのだそうです。三木さんによる解説の一部を紹介しました。

まさに、大きな地球がはるかな時とともに生命を育くんだように、小さな地球である私たちも母親の胎内で凝縮された時とともに発生の過程を繰り返し生まれ、この世に誕生してくるのです。

2. 「命・人間」をめぐる私たちがもつ視点

こうして生まれてきた私たちは、育つなかで多くのことを学んでいきます。生まれて治療の必要な赤ちゃん達やそのご家族達に関わられていた橋本さんは、私たちが命や人間を見る時、二重の視点を持っていると教えて下さいます。「生命」の視点については、「科学や医療の対象として、自分と切り離して外側から客観的・科学的に捉えるとき、命や人間は、数値やデータで表すことが可能であり、統計的に処理することや、基準に従って選別することさえできる。」（橋本 2000, p.3）としています。そして、この視点の確立により医学が進歩発展してきたことが言われています。また、「いのち」という視点においては、「かけがえない『我が子』や『愛する人』として見ているとき、客観的・論理的に割り切ることなど不可能になり、好むと好まざるとにかかわらず、相互交流的・相互関与的な関係に生きることになるだろう。そこでは、統計は意味をなさない」（同掲書 p.3）としています。この視点は、「代替のきかない唯一無二の存在として」見ることとなり、「親子をはじめ、人と人が出会い関係が育つには必須の視点」と言われています。そして、誰もが両方の視点を持っている、「時に応じてどちらかがより活性化される」と言います。

私たちは、この「生命」の視点と「いのち」の視点の狭間で揺れながら生きているとも言えます。「いのち」の視点から、私たちが生きることは、生かされているということでもあり、ともに生きることもあるように思います。私たちが互いに「いのち」として出逢っていくということは、例えば、こういうことでもあるのではないかと教えてくださる歌があります。

3. 私たちが生まれ出逢い生きていくこと

私たちが「いのち」として出逢って生きていくことを伝えてくれているひとつと思えるは、スキマスイッチさんが歌う「未来花（ミライカ）」です。歌詞を以下に載せたいと思います。

「未来花（ミライカ）」 スキマスイッチ

僕は死ぬまで いったい何回

隣に居るあなたの 名前を呼べるのだろう

誰もがみんな 生まれてすぐに
命の証として もらった贈り物

愛に包まれて 愛を覚えて
出会いと別れ繰り返し こうしてあなたにめぐり会えた

僕が優しくあなたを呼ぶ そのたび心に一輪の花が咲く
このままずっと抱きしめていたい 萎れてしまわないように
美しく輝くその花は 未来

あなたと一緒に あとどれくらい
「おはよう」で始まる朝を 迎えられるだろう

声が届き 声を返す
そんな 何げない日常 ひとつひとつに愛情の種を撒こう

僕らが歩む道の途中 暗闇もあるだろ それでも手を繋ぎ
いつもよりもっと話をしよう 素直な二人のままで
潤んだ瞳に映るのは 未来

僕が優しくあなたを呼ぶ 振り返る笑顔 一輪の花が咲く
このままずっと この先ずっと 小さな幸せ束ねよう
眩しいくらい美しく輝く
僕の胸でそっと揺れている
真っ白なその花の名前は

未来

私たちは、橋本さんが言うように「客観的・科学的に捉えられた」科学や医学の発展により今も救われていることは多々あります。そして、私たちのなかにもその「生命」の視点を持つと共に、「いのち」の視点をもっています。それは、「相互交流的・相互関係的な関係」のなかに生かされ続けている「いのち」です。それをずっとずっとそれをさかのぼっていけ

ば、先ほど挙げました、私たちがこの世に生まれ来るまでの世界にたどり着きます。三木さんは、「母親の胎内で十月十日、こうした遠い祖先の悠久の歩みを“からだを張って”なぞり、復習し続けたのです。それは、私たち一人一人の、“生命記憶”となって、文字通り骨の髄まで浸み込んでいる」（三木 2013, pp.62-63）と言います。「三十数億年の生命進化の圧縮」を私たちは、身体の内深くに刻んでいます。そして、三木さんは、その身体の中に“ところ”をみえています。脊椎動物の内臓系の中心に心臓、体壁系の中心に頭脳が位することを述べ（三木 2017, pp.80-81）、また、その内臓の感覚と“ところ”について述べています。そこで、ところで感じることを表す時に、“胸の奥から”“肚の底から”といった表現を私たちはごく自然にすることを言い、「胸部内臓と腹部内臓つまり『からだの奥底に内蔵されたもの』との深い共鳴を言い表したものではないでしょうか……。このことは『ところ』の漢字の『心』が心臓の象形であり、しかも、この心臓が内臓系の象徴であることを思えば、いっそう明らかになると思います」（同掲書 p.64）と教えてくれています。確かに、例えば「ところが痛む」といった時に、自然と手を胸（心臓）のところに当てていることが思い浮かびます。ここで、あれれ…と思いました。「自然」という言葉は、私たちが生まれてきた自然（界）の他に、「自然と～する」というようにも使うのだなあ…って。「自然と～する」というのは、とても意識して何かをするというわけではなくて意図せず的なものも併せ持つようなニュアンスがあります。きっと、ここで辞書引いてそのことは…といった形で書いていくほうがいいのかもしれませんが…。ずっとここまで、なにかずっと緊張して書いてきました…。エッセイなんだからもっとリラックスリラックス…。…と脱線してしまいました…話を戻します。自然のなかから生まれてきた私たちだから、とても自然に親和性があるのかもしれない。私たちは多くの自然からの驚異に恐れおののくこともあります、私たちを癒やしてくれるのもまたその自然であるように思います。この新型コロナウイルス流行の先に見える渦中に聴くスキマスイッチさんの「未来花（ミライカ）」がところに響いてくるのは、私だけでしょうか…？「未来花（ミライカ）」は、だれのところにもあるというのです…。

4. 自然のなかから生まれ、また自然のなかに帰っていく「命」と「いのち」

アメリカの哲学者レオ・バスカーリアさんによって書かれた『葉っぱのフレディ——いのちの旅——』（童話屋 2007）という絵本があります。葉っぱのフレディの一生が四季とともに描かれていきます。同じ葉っぱの物知りダニエルからフレディは、ともに過ごし体験するなかで、仲間の葉っぱのこと、季節のこと、死ぬこと、いのちのことなど教えてもらいます。

秋が来て仲間の葉っぱ達は、「そのとき が来て 引っこしていきました」。ダニエルも、フレディに別れを告げて枝をはなれていき、フレディはひとりになりました。そして、フレディもまた「迎えに来た風につけて枝をはなれました」。フレディの引っこし先は、雪の上で

「ふわふわして居心地のよいところだったのです」。目を閉じ眠りについた葉っぱのフレディのいのちは、どうなっていくのでしょうか…。絵本には次のように書かれています。

フレディは知らなかったのですが—
冬が終わると春が来て 雪はとけ水になり
枯れ葉のフレディは その水にまじり 土に溶け込んで
木を育てる力になるのです。

“いのち”は土や根や木の中の 目には見えないところで
新しい葉っぱを生み出そうと 準備をしています。
大自然の設計図は 寸分の狂いもなく
“いのち”を変化させつづけているのです。

地球と同じ元素を持つ小さな地球である私たちもまた、身体という「命」には限りがありその終焉を迎え、大きな地球のもとに帰っていきます。でも、その「いのち」の働きは、目には見えないところで受け継いでいかれるのかもしれません…。

5. 「いのち」の永遠性

こうして私に「いのち」について考えることを教えて下さったきっかけは、流産でぷうちゃんという名前のお子さんを亡くされたお母さんの手記でした（流産・死産経験者で作るボコズママの会編集 2007）。そのお母さんの手記を丁寧に追うことができればいいのですが…紙面に限りがあり、その一部を書かせて頂きます。私がこうして書き換えることで、ぷうちゃんのお母さんである山ノ鼻さんのお伝えになりたいことが、あまり伝えられていないようでしたら…申し訳ありません…。

ぷうちゃんの死は、エコーで心臓が動いていないことでわかりました。医師からの説明は、「本当は妊娠十二週目だが、成長具合は十一週目なので、十一週目の流産の扱いになるとのこと。初めから精子と卵子の結びつきが悪く、育たない子だったこと」（同掲書 p.15）。そして、「万が一こんな子が生まれてきていたらたいへんなことになる。親に迷惑かけまいと自分から逝ってくれたことに感謝しなくては」（同掲書 p.15）と言われました。その医師の言葉に彼女は「思わず夫の手をぎゅっと握りました。ぷうちゃんは生まれてきてはいけない子なの？ 存在自体が否定されるの？ 悔しかった。握った手の上に涙がポトポトと落ちました。看護師が気の毒そうな顔をして、そっとティッシュを差し出してくださいました。その後も医師は、夫と私の質問に丁寧に答えてくださいました。何度も『お父さんもお母さんも誰も悪くないですよ。誰にも責任はないのです』と強調され、少し楽になった気がしました。」（同掲書 p.15）と書かれています。流産手術の後、「胎盤は検査へ。他（胎児）は破

棄」という言葉を山ノ鼻さんは耳にします。退院後、彼女は心身共に追い詰められていきます。彼女は「もし、あと一週間頑張って十二週目まで成長していたら、一人の人間として扱ってもらえたのに。十二週未満の赤ちゃんは墓地埋葬法上、死体として扱われず埋葬する義務はないそうです。なぜ、たった一週間の差で人間とゴミとに分けられるのか。怒りで発狂しそうでした。守ってあげられなくて本当にごめんね。破棄されて怒ってないかな？ 一人で寂しくないかな？ 心配で不安で胸が押しつぶされそうでした。……省略……」（同掲書 pp.18-19）と綴ります。しかし、彼女は、ともに苦しみながらそれでも見守り続けたご家族や親友によって支えられ、「悲しみの沼に底を築いてくれたようでした。」（同掲書 p.20）と少しずつ変わっていかれます。そして、「この悲しみから這い上がろう。ぷうちゃんは私を苦しめるために来たのではない。悲しい別れではあったけれど、夫婦の絆を深め両親への感謝を教え、いかに私が周りの愛情に恵まれているのかを再認識させてくれました。」（同掲書 p.20）と振り返られます。

ぷうちゃんのお母さんである山ノ鼻さんが書かれたとても印象的な言葉を、最後に挙げたいと思います。「どんなに医学が進歩しても、完全に流産を防ぐことはできないでしょう。人間の力が及ばない神聖な領域だからこそ、生命の誕生は神秘的で素晴らしいものだと思底います。それゆえ、どんな命に対しても母親の胎内で芽生えた瞬間から、一人の人間として敬意を払ってほしいのです。たとえ初期流産でこの世に生まれてくることができなかった子だとしても。」（同掲書 p.21）と記しています。私は、先に大きな地球に帰っていったぷうちゃんから、そしてそのご家族やお友達、山ノ鼻さんご家族を支えた仲間の方々から「いのち」について学ばせて頂きました。

ここで再び三木さんのところに返ります。三木さんは、自然を見る人間の眼のひとつとして、“こころの眼”を挙げています。それは、“すがた・かたち”を静観する眼であり、これは路傍の石ころを見ても、川のせせらぎを耳にしても、秋の気配を感じても、生きた表情で私達に語りかけてくる生に満ち溢れたものになり、時間や空間にも生命が宿ると言います（三木 2013, p.18）。

「いのち」は“こころの眼”、先に三木さんによって言われた「こころで感じることを表す」ことによって、身体としては存在しなくなったとしても、ぷうちゃんのいのちは、「時間や空間」にも宿ることができます。ぷうちゃんのお母さんをはじめとして、そのご家族やお友達や、仲間の方々、そして手記を目（眼）にした私のこころのなかで、ぷうちゃんは生き続けているように思います。

三木さんのいう“こころの眼”を使うことによって、他者が大切にしている存在を感じることが出来るかもしれません。例えば、「ペット」と呼ばれる、その人にとってはとても大切な“家族”。そして、例えば、ある人が祖母からプレゼントされた置物を大切にしています。そうすると、その置物はただの物ではなく、祖母からのその人への想い、そしてその人の祖母への想いが宿り“いのち”が吹き込まれます。だからその大切な存在が割れると、その人はとても悲しいのです。でも、たとえ見える存在でなくなったとしても、その大

切に想う“いのち”は、その人の「空間や時間」に寄り添い存在し続けてくれるのではないのでしょうか…。

最後に

行ったり来たり私の文章、とてもまどろっこしく感じられた方もいらっしゃると思います。

それでも最後までおつきあいくださり、ありがとうございました。

「いのち」のゆくえは、それぞれに信じるものがあると思います。ですから、信じていらっしゃるそのことを大切にされ、私が人生の先輩方々から教えて頂きまとめさせて頂いた「いのち」は、そういう考え方もあるのだと思って読んで頂ければ幸いに思います。

教えて頂いたこととして

私たちは、「命・人間」を「生命」という視点で、自分と切り離し客観的・科学的に見ることもできます。そして、「いのち」という視点で相互交流的・相互関与的な関係のなかで生き生かされ続けていることを感じることもできます。その視点の狭間で揺れながら生きています。きっと私達にとって、それらはどちらも大切な視点であるようにも思います。時に、私たちが、こうしてこの世に生まれてくるまでに身体の奥底に刻んできた生命の記憶を、呼び戻し感じることによって、もしかしたら……その悲しみや苦しみを少しでも癒やしてくれるものになるかもしれません。私たちのいのちは小さな地球であり、大きな地球から生まれ、そして、ふたたび大きな地球にもどっていきます。そして、「いのち」は続いていきます。

参考文献

- 橋本洋子『第2版 NICU とこころのケア—家族のこころによりそって』メディカ出版 2011
流産・死産経験者で作るボコズママの会編集『ともに生きる たとえ産声をあげなくとも』
中央法規 2007
レオ・バスカーリア作、みらいなな訳『葉っぱのフレディ——いのちの旅——』童話屋 2007
三木成夫『生命とリズム』河出書房新社 2013
——『内臓とこころ』河出書房新社 2017
スキマスイッチ（大橋卓弥：ボーカル・ギター、常田真太郎：ピアノ・コーラス）「未来花（ミライカ）」2018